

THE

VINES

by MASAKO KARASAWA photography by JEREMY GOLDBERG

一人の少年がベッドルームで作り上げた、
すべての音楽への愛に満ちた1st『ハイリー・イヴォルド』。
この作品と、その少年への世界中からの熱情的な賛辞は、
リリースから半年経った今も、まだ止むことはない。
すでに「今世紀最初のロックンロール・スター」への道程を、
彼らが歩み出しているのは間違いないだろう。
輝きと興奮に満ち、そして微かな不安を感じさせる、
彼らの現在地を、前号に引き続いてレポートしたい

94年にカート・コバーンがこの世を去って以来、「ロック・スター」はずっと音楽シーンでは不在のままだった。もし、その王冠を手に入れるであろう候補を挙げるとしたら、エミネムくらいかも知れない。しかし、事実として、90年代半ば以降から、我々は誰もが認めるような「ロック・スター」には出会うことがなかった。

そして、2002年、ザ・ヴァインズのフロントマン、クレイグ・ニコラスは、そのスター・ロードを誰よりも着実に歩いているように見える。このシドニー郊外出身の4ピース・バンドは、今年の春にデビュー・シングル「ファクトリー」をリリースして以来、英国のメディアを中心に熱情的な支持を獲得している。欧州を巡るツアー・サーキットを繰り返す中、6月に1stアルバム『ハイリー・

イヴォルド』を発表するや、その熱波はすぐにアメリカまで飛び火。ビルボード・チャートでは初登場11位という快挙を成し遂げる。その後もチャートインし続け、15週目の11月第一週現在も80位に位置している。早くも、セールスは50万枚を超えた。老練の音楽誌「ローリング・ストーン」までもが彼らを表紙に飾り、「ロックンロールの復活!!」と大見出しを打つほど、ザ・ヴァインズを取り巻く状況は白熱してゆく。そう、イギリスとアメリカでのザ・ヴァインズは、本当に凄まじい大ブレイクっぷりののだ。これほど、海外と日本とで温度差があるバンドはいないだろう。しかし、間違いない、2002年世界でもっとも成功したニューカマーは、ザ・ヴァインズだ。そう、シドニー郊外の街の、ベッドルームで海外の

音楽にばかり耳を傾け、スピーカーから聞こえてくる小さな別世界に住んでいたクレイグ少年の生活は、この十数ヶ月間で、目も眩むようなアメリカン・ドリームさながらの大変化を遂げたのだ。

しかし、そんな輝かしい物語と共に、古典的「ロック・スターの悲劇」という物語も、私達は嫌というほど知っているはずだ。「名声を手にした少年は、それと引き換えにハードなロードワークとドラッグで身体と精神をボロボロにしてゆく」というやつだ。そして、現在の彼らを取り巻く状況は、嫌が応にも、かつてニルヴァーナが歩んだ道程を思い起こさせる。シーンに広がる熱狂的支持と共に、メディアはフロントマンにエキセントリックなキャラクター付けをし、「ロックの救世主」とブチあげる。新しい作品も作れないまま、バンドはどんどん巨大化してゆく——そんなことが、どうにもニルヴァーナとオーヴァラップする。例えば、あなたは、最新シングル「アウトザウェイ!!」のビデオ・クリップを目にしただろうか？ どう見ても彼らのファンとは思えない、ハードコア・パンクを出で立ちのオーディエンスが、ライヴ・ハウスでモッシュしまくり、クレイグが半狂乱で駆け回り、ステージの機材をめちゃくちゃに壊す——という代物。そう、ニルヴァーナの「スメルズ・ライヴ・トゥー・スピリット」とそっくりなのだ。音楽性のかけ離れたオーディエンスをエキストラとしてかき集め、作り込んだ演出によって、バンドに新たなイメージ付けをしようとしたあのビデオに、カートが落ちて落ち込んだのは、有名な話だ。

しかし、そんな状況の中、クレイグ・ニコラスの創作意欲は、今、尋常でなく高まっている。このインタビューでも、彼は2ndアルバムの構想を、幾度も、本当に深しそうに語っている。「自分は何にも惹かれな、音楽



僕は外に出て酔っぱらうよりも、部屋で音楽を聴いてることの方がずっと幸せだった。自分で曲を書き始めてからは、もうその興奮に取り憑かれちゃって……それから、もうドラッグにハマるのも、マクドナルドで僅かな小遣いを稼ぐような毎日でもゴメンだと思った。つまり、僕は、自分の頭がおかしくならないようにするために、音楽を作るしかなかったんだ

そのものだけにフォーカスするんだ」と自答するように繰り返している。この取材が行われたのは、8月第一週。アメリカでのブレイクが、最高潮に達した時期のものだ(それについての詳しい状況は、前号を参照して欲しい)。種々かまムドと始まった、約40分間のこの会話から、ザ・ヴァインズというバンドが歩んでいる道程を、まずは感じ取ってみて欲しい。

interview with CRAIG NICHOLLS

●今日はアメリカ・ツアーの最終日ですね。で、この後、ようやくオーストラリアに戻るわけだけ、正直ホッとしてるところはあったりしませんか?

「まあね(笑)。でも、色々楽しかったし、このツアーも無事に終わることが出来たから。僕らにもお客さんにも、怪我ひとつなかった。サポートしてくれていたバンドも、どれもいい雰囲気だったから、すごく満足してる」

●実際のところ、二十数ヶ月ってというのは、あなたにとって目まぐるしく状況や環境が変化した、狂乱の日々、と呼べるものだったじゃない? その日々変化する状況に身を置くことに、戸惑いを感じたりはしなかった? 「それは……うん、やっぱりオアシスの部分は確かにあったよね。でも、それってライブには付き物っていうか、それこそが魅力だって言えるものだしとも思うし。まあ、ステージの上に限って言えばね(笑)。これまでの僕だったら考えられないくらい、色んな人達とも出会ったけど、今はもう、あんまり気にしないようにしてるんだ。リラックスした気分がライブをこなして、必要であれば静かにする時間とか、飲みに行く時間を取るようにしてるし。ゆっくりとしたペースで、バランスが取れるようにね」

●OK。例えば「NME」なんかを筆頭に、クレイグ・ニコルズという人物は、こんな風に書かれてるよね。「毎日マクドナルドしか食べず、部屋でニルヴァーナとビートルズばかりを聴いていた、引きこもり少年で」……

「アハハ。うん。そんな感じだよ(笑)」

●「その少年こそ、新世代のとりわけセクシーなロック・ゴッドである」みたいなさ。勿論、それは100%嘘ってわけじゃないかもしれないけど、あまりにあなたをそんな風にキャラクターライズしたくって仕方がない、というムードは、期間に確かにあると思わない?

「もしも僕に、本当に代弁出来るものがあるんだとしたら、それは……“自分”と“自分のバンド”だけだよな。新しいインスピレーション、なんて考えたこともないんだから。そもそも、僕が自分の代弁をしているのかすら怪しいんだけど(笑)。僕は、音楽をやることでも、人と金うたえんことしかやってない。でも、それが妙な誇張をされてしまってるっていうのも、君が言う通り、事実だと思う。でも、僕なんてホントただの駆け出しのアーティストに過ぎなくて……関心があるのは、音楽を作るこ

とで、バンドをやってくることだけって人間なんだから(笑)! そんな僕を、音楽以外のポイントから注目してみたって、何も面白くないはずなんだよ(笑)。まあ、事実、アルバムを作った時はジャンク・フードばかり食べてたけど。マクドナルドに限らず、もう四六時中。でも、その間、それよりもっとたくさん音楽を僕は聴いてたんだ。僕が家に引きこもってたっていうのも本当だけど、僕は外に出て酔っぱらうより、部屋で音楽を聴いてることがもっと幸せだったんだ。自分で曲を作り始めてからはもうその興奮に取り憑かれちゃって……うん、それを知った時から、僕はもうドラッグにハマるのも嫌だと思っただけ、マクドナルドで僅かな小遣いを稼ぐために毎日を過ごすのもゴメンだっと思ったんだ」

●うん。

「つまり、僕は、自分の頭がおかしくならぬようにするために、音楽を作るしかなかったんだよ——って、こんな話ばかりしちゃうから、いろいろと誇張されちゃうんだろ(笑)。アハハ。でも、僕が好きなものは曲を作ること、レコーディングをすること、絵を描くこと。それだけ。出来るだけ生産的でいたいんだよな。それってつまり、今からでも、すぐにレコーディング・スタジオに入って、新曲を作りたく」ってことなんだけど。他人が僕らをどう見ようとか、それは結局僕自身にはどうすることも出来ないことだし」

●じゃあ、質問をちょっと変えましょう。前に話を聞かせてもらった時、あなたは「僕にとって外の世界、現実の世界には何の意味もなかった。自分は内側の世界、ザ・ヴァインズに取り憑かりきりだったんだ」と語っていました。「そのフィーリングを感じ続けるために、僕はバンドをやってるんだ」ってね。ただ、今は、ザ・ヴァインズとしてこうやって世界中をツアーして回ることがあなたの日常になってるわけだよな。それはつまり、現実世界とあなた、ザ・ヴァインズの関わり方が、以前とはまた違ってくる意味を持ち始めた、とも言えないかな?

「うん……音楽を聴くことは、勿論、これまで僕ら全員にとって僕のインスピレーションだったけど、楽器を演奏することも歌うことも僕は好きだし、そういうものだったんだよ。学校で、教師に就職したことなんかの取組を受けても、僕はさっぱり理解出来なかった。でも、音楽ってというのは、たとえ理解出来なくても、サウンドとイメージを、ただ感じ取れさえすればいいものなんだ。うん、確かに昔と今では僕らを取り巻く環境は大きく変わっている……今はライブがメインになってるけど、ライブだってスピリチュアルで表現力豊かなものになり得る。例えば、このバンドはシングルやEPのために曲を作るとして、アルバムを最重要視してる。「ハイレイ・イヴォルヴド」に入ってる曲もヴィジョンに基づいて力を尽くした曲ばかりなんだけど、その次、ライブで演

奏する時には、その曲をどれだけ楽しめるかってことが重要になってくるんだ。勿論、その日のムードによって演奏は変わってくるしね。スローだったり、アグレッシブだったり。でも、それって「音楽を聴き続ける」という根本的な部分は変わってないじゃない? それに僕の頭の根はいつだって曲作りのことで一杯だし、もう次のアルバムのアイデアもほとんど固まってるんだ(笑)。だから、うん、流れにまかせる部分は以前よりもずいぶん増えたかもしれないけど、コントロール不能ってところまでは、まだ至ってないって感じかな」

●昨日、初めてライブを観てもらって……

「どうだった?」

●うん、すごく楽しませてもらいました。あなたが言った通り、同じ曲でもアルバムとはまた全然別の魅力が生まれてきてると思えた」

●だったら良かった(笑)」

●ただ、それと同時に、あなた達がまだバンドとしてクリアなまきやならぬ課題も、まだまださんあるってことも確認した感じなんだよね。

「うん、僕もそう思う」

●それは、バンドとしてのサウンドの厚みや、それぞれのプレイヤビリティにおいての課題だと思ふんだけど。さき次作の話をしたけれど、そこまで、まず自分達がクリアすべき課題があるとしたら、あなた自身はどんなポイントだと思う?

「バンドをやってく目的っていうのは、結成した当時から変わってないんだ。音楽を聴いた時に感じる、パワフルで特聖なフィーリングのためにやってるんだ。だから、どんなポイントが大事かっていうんじゃないかって、歌詞、メロディ、アレンジ、ドラムのビート、そのすべてが等しく重要だし、それらをどう組み合わせていくかっていうのが問題だと思うんだ」

●うん、それはそうだね。

「だから、僕はステージの上から「俺を見ろ!」みたいなのをやりたとは思わないし、ギター・ソロで目立ちたいとも思わないし。音楽そのものと、ソングライティングの課程で生まれる素晴らしい解放感、それがすべてだと思うんだ。だからこそ、ライブってその一瞬一瞬が大切になってくるし、毎日違ったものになってくる。当然、レコーディングとは違ってサウンドを細かくコントロールすることは出来ないけど、反対にヴォーカルの解釈的な部分では自由になるものにもなってるんだ」

●じゃあ、そういったステージの上での体験は、明らかに新曲には反映されていると思いませんか? 「ああ、間違いなく。うん、これは限りなくあるから。僕らはバンドとしてゆっくりではあるけど確実に進歩してる。新曲はかなり貯まってるし……出来れば、人気者として有名になるんじゃないかって、いい曲をたくさんやるってことで有名なバンドになりたいんだ。同じような曲ばかりでなくて、いろんなタイプの曲を柔軟にこなす

「自分達のアルバムを作る」ってことが、本当に大きな夢だった。それが実現した今、次の目標はさらにグンとステップアップすることなんだ。1stの出来には満足してるけど、僕らは休んでなんかはいられないんだ。だって、試したいアイディアは、どんどん湧いてきてる。僕の頭の中じゃ、次のアルバムの曲は、もう鳴り響いてるんだからさ(笑)!

バンドとしてね。今のところ僕らは、割と古典的な歌ものを作ることで知られるようになってる。コーラスのきれいな曲とかね。そういうのは実は2曲しか入ってないのに関わらず。まだ1stしか出してないから人々の印象に限られてるんだ。2ndはもうちょっと時間をかけて、もっと多くのトラックを使おうと思ってる。実は1stの時も、ヴォーカル、ギター、ピアノ、その他の楽器で幾つものトラックを使ってみたかった。でも、結局アレンジに凝るより曲を生かすレコーディングの仕方を選んだんだ。4トラックのデモの評判が結構良かった、曲が良ければ4トラックでも映える、ってことがわかったからね」

●新作の話が続いてるけど、あなたにとってはもう「ハイレイ・イヴォルヴド」の楽曲群は、既に2年、3年以上も昔の、過去のものととして、ある意味消化されてしまった感、というのがなきにしもあらず、なのかな?

「うん、もうそれぐらい前になるよね。あれはスタジオでの作業としては最高だったし、僕らの曲に生命が吹き込まれていくのを見るのはワクワクする経験だった。それまでも自分達だけでレコーディングはしてたけど、やっぱり、いつかはスタジオでちゃんとアルバムを作りたいとは思ってたからね。それだけのものを、僕らはバンドとして持って

てて自信があったんだ。レパートリーは既に30曲は越えていた、多くの人に聴いてもらう準備は出来た。だから……あの時ののめり込みは、すごかったんだ。で、本当に上手にいったと思ってるよ。心から僕はレコーディングを楽しんだ、プロデューサーもいい仕事をしてくれたと思う。勿論ハードワークだったけど……うん、自分がちゃんと勝てるものを作り上げたと思ってる。だから、本当に「ハイレイ・イヴォルヴド」は大事の人に聴いてもらいたかった。つまり、そう、「音楽とガジェット」が僕らのすべて、ってことなんだけど(笑)」

●最初のインタビューをさせてもらった時、私は「ハイレイ・イヴォルヴド」を、「クレイグの十数年に渡る音楽との家業を封印した作品だ」と書いてみたんだけど……「アハ」「蜜月」っていうのは、いいね(笑)。でも、2ndアルバムはさらに良くなるんだから! まさに今の僕らを代表するこの世の出来る12曲を選んで、ヴォリューム2として感じの雰囲気になるんじゃないかな。歌が中心っていうのは変わらないけど、プロダクション的にはより高度になるはずだ。今度は、もっとスタジオ作業にも時間をかけられると思うしね。それに、もうちょっとエレクトロニックな感じも加えたいと思ってるんだ。あ、でも……逆にそぞろとした、アコースティックとヴォーカルだけの曲も入れたい(笑)。「ハイレイ・イヴォルヴド」の時は、「とにかくアルバムを作る」っていうのが目標だった。僕らには、自分達のアルバムを作ることで、本当に大きな夢だった。それが実現した今、次の目標はさらにグンとステップアップすることなんだよ。1stの出来には満足してるけど、休んではいられないんだ。試してみたいアイ

ディアは、もうどんどん湧いてきてる。だって、もう僕の頭の中では、次のアルバムの曲が鳴ってるんだから(笑)」

●(笑) そうですね、ある雑誌で「2ndでは、ネプチューンズと一緒にやってみたい」なんて発言もありました。「うちのベースがずっとそう言ってるんだ。実は、僕にはそれがどういこうなのか、よくわかってないんだけど(笑)。僕としては、ケミカル・ブラザーズと一緒にやってみたいと思ってるんだ。いかにもザ・ヴァインズの曲って感じのじゃなくて……ギターは使わんだけ、彼らのデジタルなスタイルでね。僕自身、やっぱエレクトロニックな世界に興味が出てきたってところなんだ」

●エレクトロニックな作品、ダンス・ミュージックなんかだとどんなものを聴いてるの? 「うーん、そんなに数はないんだけどね。ケミカル・ブラザーズとか、プロディジーとか。ケミカル・ブラザーズが一番好きかな。でも、アウトキャストとかもイメージーションが豊かで、すごくクリエイティブな人達だと思う。うん、ダンス・ミュージックは「割と好き」っていう感じかな(笑)。あ、でも、デベッシュ・モードはけっこう聴いてるかも」

●なるほどね。じゃあ、ちょっと1stアルバムの話に戻りましょうか。

「あ、うん。そうだよな、先のことばかり話すぎちゃった(笑)。ごめん」

●いやいや、聞いてて楽しかったです。でね、「ハイレイ・イヴォルヴド」のアルバムのアートワークは、あなたが描いてるでしょ? 「うん」

●あの絵ってというのは、あなたがイメージする「カントリー・ヤード」や「イン・ザ・ジャングル」の光景だったりするのかな?

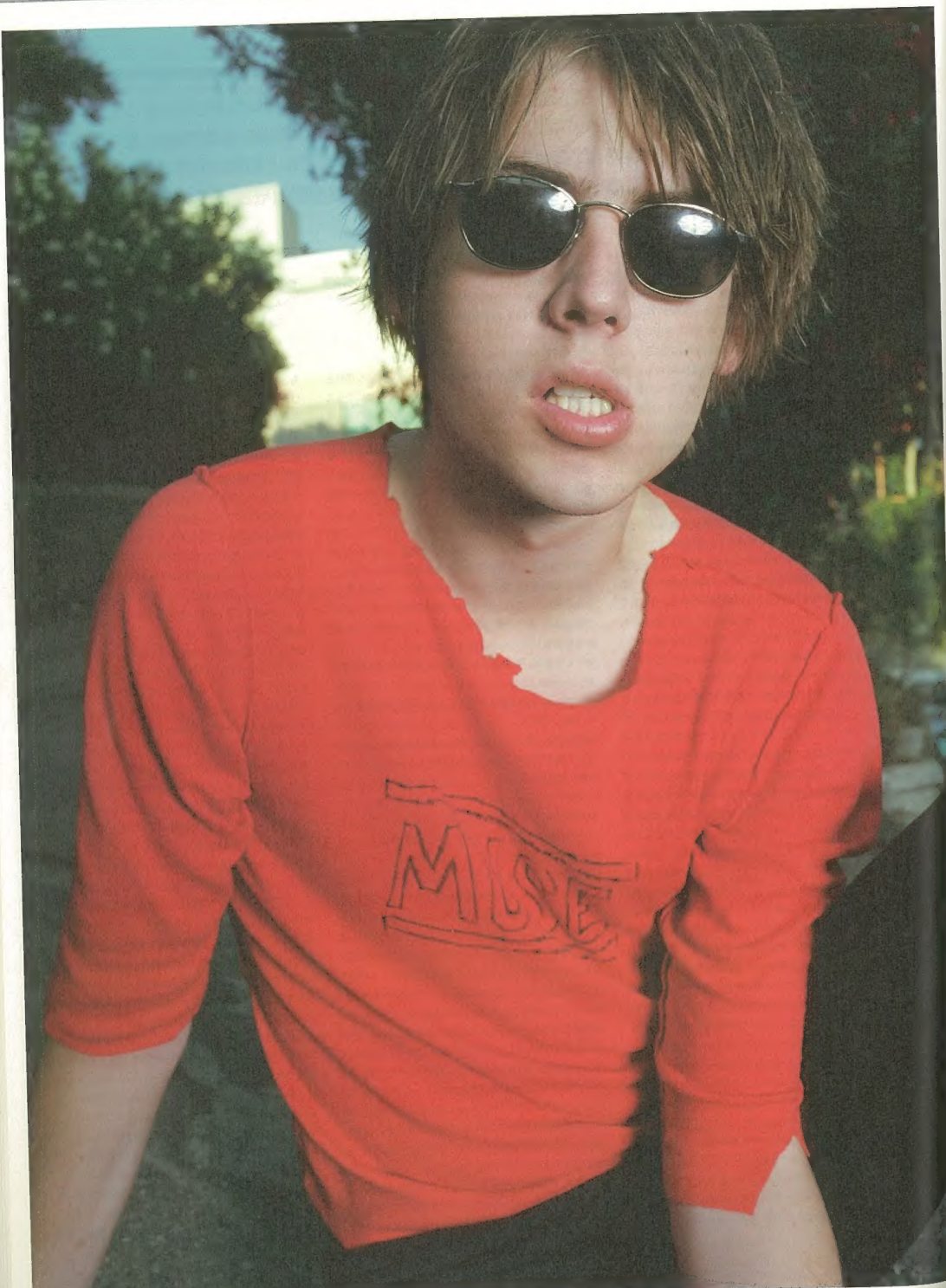
「うん! 1stアルバムのイメージは、もう最初から僕の頭の中じゃ決まっていたんだ。これくらいの……絵も僕も1.5メートルくらいあるキャンバスに、あの絵を一年以上かけて描いたんだよ。ちょっとレイアウトバックを気分、音楽を聴きながらね(笑)。そう、あれって「秘密の花園」のイメージで……どこかの片田舎の秋の夕暮、って感じなんだ。1stの曲は、どれもシドニーの森で書かれたんだけど、そこって本当にたくさんの樹木があって、不思議な場所なんだよ。ほら、あの絵には植物と夕日しか描かれてないけど、あ、バンドの名前とかね。そういうシンブルな構成が、僕らには合ってると思ったんだ。美しさ、コントロール、事……僕が好きなのは、そういうものだからね。建物とか車とかがあんまり出てこないのは、僕自身がそういうものとは縁のない環境で育ったからだと思う。メロウな環境の中で、自分の世界だけに没頭して、音楽を聴いて生きてきたからね」

●つまり、あなたにとっては太陽の光や暖かさ、本立の中の空気、緑のある風景の方が、情報が飛び回る社会とかビルの乱立する街よりも、ずっとリアルだし、親しい

ものだったってこと? 「うん、ホントその通り。あの絵は、僕にとってのとてもリアルな現実なんだ。色彩が豊かで、いい響きが漂って……そして、出来ることなら僕らの音楽もそうであってほしいと思う。勿論、視覚と聴覚は違うものだけど。でも、自然が持つような形やパターンって、人工的なものとは比べ物にならないほど印象的だと思うんだ。だから、う、あの絵が伝えてるメッセージっていうのは……「シリヤスになり過ぎるな」「沈み込むな」ってことなんだよ。確かに十代の頃なんかは、僕だって世界に対して見方を立てて、アグレッシブになったことはある。でも、そういう怒りから、音楽をプレイすることで逃げられるようになったんだ。それってつまり、自分は世の中のために何が出来たのか、ってことをやって理解できるようになったってことなんだよ。僕は音楽からたくさんものを与えてもらった、じゃあ今度は自分が何かを返す事なんだ。ってね。うん、僕はそれくらい音楽に惚れ込んでた(笑)。だって、他のことじゃ……僕は、そんなことこれっぽっちも考えられなかったもの」

●じゃあ、例えばあなたが音楽で表現しようとしているもの、あなたが描きたいと思っているものとは、同じだと思う? 「一緒とも言えるだろうし……うん、多分だけど、見えるものも聞えるものもって、繋がってるんじゃないかな。だからこそ、いろんな新しいことをやりたいたいと思うんだけど。最近、ミュージズとデベッシュ・モードのDVDを手に入れたんだ。うん、こういうのもなかなかいいかも」って思ったよ。僕は、子供の頃から絵を描くことも、歌うことも大好きで……「これは間違いない、これは正しい」ってことがないからね。感じることを、考えることも、そして意志がすべてだから。アートっていうのは、他のどんなことよりも、僕に理解出来るものだったんだ。だって、そこにはそもそも“完全な理解”ってものが存在しないわけだからね。ピュアなエモーションだけを感じ取ればいい。臆惑的だったり、スピリチュアルだったりする、そのパワーをね。考えたしなくても素晴らしいものはあるし、改めて考えるほどに素晴らしいものもある。だから、僕は……いろんな音楽を聴いて、なるべく自由でありたいと思うんだ。音楽やアートっていうのは、幅広いものであるべきだし。でも、今は、いつかビジュアル・アートの方に戻りたいって思ってるんだ。長生き出来るとしたら、いつまでもバンドは続けたい(笑)。うん、僕らの今後は、いつか本業を入れて、自分の絵を描くこと。アプローチ的には、ソングライティングもペインティングもすごく似てるしね」

●いつまでもバンドは続けたい、っていうのは、「ハイレイ・イヴォルヴド」ってタイトルじゃないけど、バンドという、すごくハイ・エナジーな状態を続けてゆくのはキツイし、難いって感じしてるから? 「えっと……僕らはこれからのいいアルバムを作ってゆけ



確かに十代の頃は、僕だって世界に対して腹を立てて、アグレッシブになってたことはある。でも、そういう怒りから、音楽をプレイすることで逃げられるようになった。それってつまり、自分は世界のために何が出来たのか、やっと理解出来るようになったってことなんだ。僕は音楽からたくさんのものをもらった、じゃあ今度は自分が何かを還す番なんだ、ってね

と思うし、上達もしてゆけるとは思う。将来的に人気があるかどうかはわからないけど(笑)。でも、自分達が楽しんで満足することが、一番大切なことだから。外側からも内側からも、プレッシャーがかかりすぎないことも必要だし……実際、精神的に参っちゃたことも一時的にはあったけど、それって誰にでも起こることだよ。だから……うん、スタジオでレコーディング出来たのは本当によかったと思ってる。自信を持って僕らのプロジェクトだって言えるし、自分達ですべてをコントロールしてるし。振り回されてるって感じる事はたまにあるけど。今はとにかく、スタジオに戻ってレコーディングを再開したくてたまらないんだ。やりたいことはたくさんある。1stだけであと2年も世界中を回る。なんてことはしたくない。だって、それじゃせっかくバンドを、音楽をやってる意味がなくなっちゃうだろう? 自分達の音楽が注目されて、バンドが有名になるっていうのは嬉しいことだけど、僕個人が有名になってしまうのは嫌なんだ。ここまできたのだから、自然発生的な進化だったし。何というか……アルバムレコーディング中、ある演奏をした時にスパークを感じたんだよね。そこからだんだんシリアスな感じになっていった。だから、僕らの音楽をより多くの人に聞いて欲しいんだけど、客観性は保っていかなくちゃ、って思ってる」

●最後に一つだけ。実は、私はホルの「リヴ・スルー・ジス」にもすごい影響を受けてしまった人間のな。[「アハ、そうなんだ(笑)」]

●(笑) だから、あなたと同じく、あの90年代前半のグランジと呼ばれた音楽には、自分にとって大きな意味があるし、愛着もある。だから、あなた達のサウンドが——勿論、すべてにおいてではないけれど——ニルヴァーナから確かに何かを受け継いでいる、という事実は、すごく喜びを感じるんですね。彼らから受け継いだ何か、それはあなた自身どんなものだと思いますか?

「まず、『ネヴァーマインド』ってアルバムは聴いて、本当に楽しかった。彼ら自身も、素晴らしい人達だと思った。うん、あらゆる面でインスパイアされた。[人にあれこれ指図しない音楽]っていいかな。しかも、すごく知的で、でもインテリクなくって。だから身体で感じる事が出来たんだと思う。それに、すごく詩的だね。とにかく、他のバンドとは全く違った。ホント、あのアルバムに出会ってから、他の音楽は聴けなくなっていくくらいだったんだ(笑)。うん、だから確かに『ハイリー・イヴルグッド』に入ってる古めの曲には、彼らからの明らかな影響が表れてるんだと思う。ギターを手にしてジャムしてみよう、って僕を僕らに起こさせたのは、ニルヴァーナに他ならないよ。うん、間違いない、ザ・ヴァインズの生みの親だと思える。それくらい、当時は大きな存在だったんだ」

取材が行われた数十分間、クレイグは努めてチャール

だった。一つひとつの言葉は柔らかで、そして(読んでもらった通り)音楽への敬愛と、2ndアルバムへの意欲に溢れていた。その日着ていた「MUSE」と書かれたTシャツについて訊ねてみると、恥ずかしそうに顔をクシャクシャにしながら「(笑) うん、ミューズはすごく好きなんだ。ホントのTシャツが欲しくて、イギリスに行った時に探したんだけど見つからなくて。だから、自分でロゴを書いて、作ってみたんだ」なんて言っていた。

そして撮影。スタッフから「取材で多少疲れてるだろうから、15分くらい休憩させたい」と言われ、私とカメラマンのジェレミー、通訳女史は、外の駐車場で待つこととなった。しかし、待てども待てどもクレイグどころか、スタッフもやって来ない。日も暮れかけ、ライブの開演までに既に一時間を切っている。予定の時間から30分後、やっとスタッフに連れられて、サングラスをかけたクレイグが出てきた。すぐに撮影をスタートしたものの、どうにも様子がおかしい。ついさっきまでのチャールさが全くない。何とか現場のムードをよくしようとするジェレミーの会話にも、忙しなく身体をグラグラと揺らしながら、面倒くさそうに答えるだけ。「サングラスを取れるかな? 一枚か二枚揃える間だけでいいんだけど」「ノー」。それほど撮影が難しいのだろうか? ただ、嫌な予感とムードだけがどんどん増してゆく。次に取材を控えていたフランスからやって来たチームは、焦り始めている。無理もない、この取材までのタイムラグで開演時間はもう間近に迫っているし、何より、まともに戻らないうクレイグが、インタビューをこなすなんて誰の目から見ても不可能だからだ。「ああ、私達が先のインタビューでよかった」という正直口とした気持ちと、「こんな状態になったのは、もしかして自分の取材のせいなのか?」という不安がいつべに湧き上がってきた。そんな表情を察してなのか、撮影が終わってからクレイグがやって来た。「日本には……うん、ホントすごく行ってみたいんだ。でも、レコーディングをやらない方がいいし……」。でも、たぶん、この後もうツアーをしなきゃならなくなるそうだし……うん、次のアルバムは、来年にならないと出来ないだろうな。そうしたら……日本に行きたいんだよね。ほとんど独り言のように、小さな声でそんな風に呟いている。その表情も、声も落着いてしまっているようで、聴き取るのが難しい。足取りももう怪しくなってきた。思わず「(ねえ、大丈夫なの?)」と言ってしまった。すると、少しだけ微笑みながら、こんな風に呟いた。「うん、大丈夫。でも……体の中のエナジーはもう残ってなくて……今の僕は、カスカスの抜け殻みたいなもんだ」。

この最後の撮影だけは、気が滅入った。まわりの関係者から、「ありや、明らかにマリファナなんかじゃないね」という言葉が囁かれる。「あれは、カート・コバーンも使ってたやつさ」という意味だ——そう、私自身、そんな考えが撮影中ずっと頭の中に張り付いていた。

確かに、今のザ・ヴァインズの突出した急激なプレイは、ある意味で業界に作られた部分がある。クレイグ・ニコラスは、あまりに早く、スター・システムへと押し上げられてしまった。そのことで、彼が少なからずダメージを受けているのは、私が目にした、たった数時間の光景だけでも明らかだ。ただ、同時に、彼が音楽/ソングライティングの感性をより研ぎ澄ませているのも、また事実だ。そう、本当に微妙な気持ちになってしまう。クレイグがインタビューで、「僕らはもうオーストラリアに戻って、新しい曲をレコーディングするんだ」とくり返し言っていたのを思い出す。きっと、本当に今はそうすることが必要に違いない。だって、もう、誰も二人目のカート・コバーンには必要ないだろう?

実は、この日から一ヶ月後の9月、私は再びオーストラリアまで(自費で)ザ・ヴァインズのライブを観に行ってきた。イギリスやアメリカの半狂乱の現場からは離れた。彼らの母国のオーディエンスが、どんな風にザ・ヴァインズを聴いているのを知りたかったからだ。そして、クレイグがほんのちょっとでも、リラックス出来ているのを見たいと思ったのだ(というか、それを確認しなければ、自分自身が不安で仕方なかった、ということだろう)。シドニーやメルボルンとは違う、小都市のプリズベンという土地柄もあったのだから、ライブに集まった400人くらいのオーディエンスは、みんなのんびりとした雰囲気だった。アメリカで見たような、「今、一番流行ってやがる音楽を聴いてやるうじゃないう」的なギラギラとしたムードは皆無、バンドのステージも、セットそのものは変わらないものの、ずっと穏やかで、安定感のあるものになっていた。前号でボコソに書いたほど、リズム隊の二人もそう酷くはない。ステージ終了後、楽屋にちょっとだけ顔を出してみると、おでこに米のうを当てた本人が出迎えてくれた。「最後、ステージでめっちゃめちゃに暴れた時、自分のギターにぶつちやっったんだ(笑)」。前号の「スノーダー」をバラバラとめくりながら、「(ねえ、リチャード・アシュクロフトのアルバム聴いた? 僕はすっごいアルバムだと思ってる)」「リバーティンズも好き、スーパーグラスのアルバムもグレート!」と、本当に嬉しそうに話しているのを見て、私はほんの少し安心した。このまあとオーストラリアでレコーディング出来ればいいのにね。と言うと、「(ねえ?) でも、また来年までツアーなんだって」と顔をしかめながら笑っていた。本心としては、私だって早く彼らが日本に来てほしいと思うが、いや、しっかりと一歩一歩進んでくれればいい。そうすれば、きっと私達は、本当の意味で、21世紀最初の天才が撮影中ずっと頭の中に張り付いていた。

「ルライト」初めて聴いてしまった（持つて来ると言われてしまった）。あ、あ、あ、こりゃスロウな曲のヴァイオリンが家になってもかなわんわ、確かに。音楽聴いて鳥肌立つたんでめったにないけど、全身の血が逆立った。そんなザ・フーのキース・ムーンの幼い頃の写真を、「ロックス」のジャケットに使ったブライマルのチケットをお願いします。是非!（新宿区/佐藤徳博/22歳）

相変わらずの厚さに値段に、もうだいぶ慣れちゃいました。毎回特別定価なのが笑えます。しかし、それ以上にビビったのは、「マイ・ジェネレーション」のタナソウ氏のレヴュー!! こんなこと出版物に書いていいのって一瞬ビビったものの、2回目を読む時は笑えた。ただ、読者に殺すぞと言いつつ人が編集長の雑誌が、「スヌーザー」以外にこの世にあるのか……。 （埼玉県/近江俊裕/16歳）

ザ・フーのタナソウのレヴュー……ウザいです。そんな言われると引きまします。正直、「殺すぞ」って……ネー……。まあ、「マイ・ジェネレーション」買うつもりですぞね♡。（佐賀県/山崎剛/22歳）

一つだけ言いたいことがあります。「スヌーザー」月刊化されても、この御時世、自分の財布にはきついで! 以上。タナソウの言う通り買ったよ、「マイ・ジェネレーション」! 「もうオアシスなんか、どっか行っていいよ」って思う。世界最高のロックンロール・バンド、ザ・フー万歳。（船橋市/赤田有也/15歳）

9月のクリスマスに出演してくれたモサム・トーンペンダーの百々さんも、楽屋で「……「殺す」って、こんなこと言っちゃっていいんですか?」と機嫌が不安そうな顔してました。ちなみに、今号ではわたくし唐沢が、チ○コだマ○コだ書いてたりしていますので、死ぬほど時間が余ってる方は探してみてください。

「レディオヘッド音楽団」のツアー・レポート、すごい親密でよかったです。音楽って元々はこういう交流文化なんだなって思ったし、ファンとの掛け合いもなってるっていいな、と思いました。しかし、こんなにまだ聴いたことない曲があるなんて……。（下関市/前川賢輔/20歳）

そして、それをほぼ毎年、「これはヴァ

カンスだから」と言い張り、フランスやスペインに観に行く編集長って……。

今号にもよく表れた通り、最近の新人バンドのカッコよさには、何の音楽ムーヴメントも通過してこなかった世代の人間としては、ある種の感慨を抱かずにはいられない。願わくばあと2、3年早ければ……。今高校生のやぐれ少女少女達が羨ましい。「ミュージック・マガジン」なんかでライター達がバンドのことを言っているのいい感じ（今月号のザ・ミュージックの読みかた? 笑えるね! ジジイババはすこゝでろ!）。ローゼンダって旧世代には嫌われたんでしょ? うう、何か興奮して来た! ということで、「スヌーザー」にはもっと輸入盤のレヴューを増やして欲しい。新しいバンドをどこよりも早くどんどん取り上げて欲しいです。「[NME]のシングル・オブ・ザ・ウィークを取った〜」なんて形容詞はいりません。どんどん突っ走って下さい。やはり月刊化か? （船橋市/牛島俊雄/19歳）

最近、タナソウが尋常でない熱をもって推しに推しているザ・コラール、そして、唐沢さんもソッコンLOVEのイケ

ン・パワーポップ=OK GO、聴きました!! ヤバイ、更にヤバイ。バリヤバ。ザ・コラール、一回聴いた後、「これがタナソウっぽい（疑）?」! と思ったけど、しばらく経って聴いた時にビックリ! わたしもずばった!! OK GOはすごく好きだった。ピーク好きの私には少し似て部分があると思いましたが、ナンバガ解散に涙々の日々です。（相模原市/橋岡聖美/20歳）

ザ・ヴァインズの記事のラストを読んでガクゼン。なんだそのゴールデン・タイムのパラエティ番組みたいな引きはー!!! (泣)。気になる気になる。次号も買うかもしれない可能性が出てきたではないか。その前にザ・ヴァインズのCD買わね。あと、OK GOとストロークス(選)とベックとリパティエンスとコラールと……。 （金倉市/野中実保/21歳）

この間イギリスに行ってきたんだけど、旅行中に「スヌーザー」で取り上げがような、イギリスの新人さんのライブがなんか観れないかな、と思ってたら、旅行最終日(9/6)にクレセントのライブを観ることが出来たよ! 小さい会場で、見かけはあまりカッコよくないけ

シュ巻返し」の年になりそうだ。

マーク・チャップマン、

80年12月8日にジョン・レノンを射殺した、マーク・チャップマンの二度目の仮釈放が却下された。2年前に最初の仮釈放が却下された際も、ヨーコ・オノがステートメントを発表するなどして却下された彼は、現在ニューヨークの刑務所で終身刑を服役中。2年後に再度審議はされるが、殺されたのがジョン・レノンであることによって、チャップマンが仮釈放される見込みはまったくないと見られている。

ザ・ヴァインズ、

フィル・スペクターをスカウト

セカンド・アルバムのプロデューサーに、ザ・ヴァインズが「ウォール・オブ・サウンド」の伝説、フィル・スペクターをリクルート中らしい。現在スペクターはスターセーラーの新作を手掛けている、「どちらのグループにも非常に期待している」とのこと。はてさて、実現するんでしょうか。

ところでそのフィル・スペクターだが、「業界でもっとも長い著作権料バトル

ど（関係ないですね）最高でした。そして、もっとびっくりしたのは、ノエル・ギャラガーも来ていて、僕の前を通った時は、もう涙でしまった。あまりオーラは出さなかったようです。

（東京都/清水直/21歳）

「か、かわいすぎる……」と口走ったきり、我に戻るまで数十秒。そう、ザ・ヴァインズのクレイグ君! スヌーザー史上最高の上モノ美少年じゃないですか! あの顔であのシャウトと思うと、とお姉さんはもう堪りません。生で、ぜひ。35歳が許すって、きつと。それから、ぼつてりとしたジュリアンも、抜け毛を気にするクリスも、私がまとめて引き受けましよう。デブ専/ハゲ専と呼ばれるらしい頃の血が騒ぐ。ビィ! 逆ハーレム(妄想大爆走!!)。 （大阪市/金沢裕美/35歳）

3号連続でロックンロールと特別定価。ロックンロール大騒ぎ! & ドヤ顔な大学生にとって鬱病になりそうな程ショックです。若手ロックンロール・アーティストをプッシュしているの、仕方なく試しにストロークスのCDを借りまして、3回ほど全曲くり返して聴いてみて、全

と呼ばれる裁判を88年からザ・ロネット

と続けた。それが10月17日、NYの最高裁で、「フィル・スペクターはザ・ロネットに300万ドル払わなくてもいい」という判決が下った模様。結局63年当時の契約によって、スペクターに「ビー・マイ・ベイビー」など大ヒット曲の全権が認められたわけだが、ザ・ロネット側はなんと、これまでに1万5千ドルしか手にしていないとか。お気の毒です。

ザ・ストリート、

「デモン・アルバムって誰?」

先号で、自分達について曲で書いてくれたスウェードについて、オキサイド&ニュートリノが「聴いたことないだよね」と言った発言を紹介したが、今号のジェネレーション・ギャップネタは、ブラーとザ・ストリート。9月12日、ザ・ストリートことマーク・スキナーがロンドンで開いたライブに、デモン・アルバムがチェックしに来ていたのだ。マークが「ローリング・ストーン」誌に載った話は以下の通り。「彼が誰か、知らなかったんだ。で、[有名なサークル]によるこうそ?」と書かれて、「うんええ、へらへらして?」って言

バンドの公式サイトで、マネージャーのパティスがファンからの手紙に答えたところによると、R.E.M.の新作レコーディングはすでに各地で始まっているらしい。「今度は短期間ずつ、あちこちでレコーディングする予定なんだ。アセンスで数週間やって、冬にはあつたかところへ行って、春にはまた別のところまで。って感じで、来年の夏にはライブも数回やるかもしれない」。

そして! 10月3日には元ドラマーのビル・ペリーとともに、マイク・ミルズとマイケル・スタブが同じスタジオに立った。地元ジョージア州アセンスの上院議員、ダグ・ヘインズの再選の応援コンサートに出演した「ミルズ/トックス」。

然ダメ。逆に頭が痛くなってきました。最近ロックンロール・ムーヴメント再来、みたいな感じですが、私にとっては「暗黒時代突入」って感じですね。この頃やけに「BGMでエフェックス・ツインが流れたりしています」。シガー・ロスの新作はもう少しだ!! 唐沢&タナソウの時代は6ヶ月です!! 次号の空しいクリスマス特集&特別定価580円(心と体に「寂しい」) 34号を新編集長ダイジローさんにお楽しみ! 別名、ダメジロー(駄目次郎) 号。発禁本にすりそうすね。 （山口市/藤川拓郎/19歳）

人間失格ストーカー=ダイジローへの励まし/失笑の手紙も、今は多数頂戴しました。皆さんの伝のようなお心遣いに感謝しつつ、その中から幾つかご紹介。

フェス記事目当てで買ったんですが、スタッフの失踪で大変だったんですね。ダイジロー君、最低ですね。男らしくないよ。加藤君の失踪の理由は? おデブでしんどかったから? ま、わかるけど、一体どんな巨漢なんだよ。でも、他の雑誌のフェス記事も読んでみて、「スヌー

ー」の一番おもしろかったよ、本当(あれ? 失踪事件がおもしろかったのか?)。唐沢姉さんが、手紙を置いたら安心だね(モッシュ・ディット気をつけて!)。もう俺も癒えてきた頃やもしれませんが、ダイジロー君と加藤君へ。私も大変な弱虫なので、人のことをエラそうにはまったく言えないわけじゃないんですが、自分の心が弱っていたり、寂しい時は(やさしくしてほしい時)、誰かにやさしくしてあげる事です。身の回りの人にね。唐沢さんにはやさしく! やさしく! 女性なのだから! 猫ちゃんやワンちゃんにもやさしく! やさしく! 私の家では猫を溺愛しています。（香川県/金丸美也子/29歳）

わかるよ、ダイジロー。僕は彼女にフ

ワケだ。彼とは違う種類の人間なんだ。俺はた。そのままだ列車に乗って都人に俺は、音楽を作りに戻って。なんか、グレアムのブラー脱退騒動も含めて、今最近のデモン・アルバム、格好悪いですねえ。ま、とにかくイギリス・シーンの世代交替は進んでいる模様です。

R.E.M.、新作リリース間近

バンドの公式サイトで、マネージャーのパティスがファンからの手紙に答えたところによると、R.E.M.の新作レコーディングはすでに各地で始まっているらしい。「今度は短期間ずつ、あちこちでレコーディングする予定なんだ。アセンスで数週間やって、冬にはあつたかところへ行って、春にはまた別のところまで。って感じで、来年の夏にはライブも数回やるかもしれない」。

そして! 10月3日には元ドラマーのビル・ペリーとともに、マイク・ミルズとマイケル・スタブが同じスタジオに立った。地元ジョージア州アセンスの上院議員、ダグ・ヘインズの再選の応援コンサートに出演した「ミルズ/トックス」。

ー」の一番おもしろかったよ、本当(あれ? 失踪事件がおもしろかったのか?)。唐沢姉さんが、手紙を置いたら安心だね(モッシュ・ディット気をつけて!)。もう俺も癒えてきた頃やもしれませんが、ダイジロー君と加藤君へ。私も大変な弱虫なので、人のことをエラそうにはまったく言えないわけじゃないんですが、自分の心が弱っていたり、寂しい時は(やさしくしてほしい時)、誰かにやさしくしてあげる事です。身の回りの人にね。唐沢さんにはやさしく! やさしく! 女性なのだから! 猫ちゃんやワンちゃんにもやさしく! やさしく! 私の家では猫を溺愛しています。（香川県/金丸美也子/29歳）

（香川県/金丸美也子/29歳）

わかるよ、ダイジロー。僕は彼女にフ

ワケだ。彼とは違う種類の人間なんだ。俺はた。そのままだ列車に乗って都人に俺は、音楽を作りに戻って。なんか、グレアムのブラー脱退騒動も含めて、今最近のデモン・アルバム、格好悪いですねえ。ま、とにかくイギリス・シーンの世代交替は進んでいる模様です。

R.E.M.、新作リリース間近

バンドの公式サイトで、マネージャーのパティスがファンからの手紙に答えたところによると、R.E.M.の新作レコーディングはすでに各地で始まっているらしい。「今度は短期間ずつ、あちこちでレコーディングする予定なんだ。アセンスで数週間やって、冬にはあつたかところへ行って、春にはまた別のところまで。って感じで、来年の夏にはライブも数回やるかもしれない」。

R.E.M.、新作リリース間近

バンドの公式サイトで、マネージャーのパティスがファンからの手紙に答えたところによると、R.E.M.の新作レコーディングはすでに各地で始まっているらしい。「今度は短期間ずつ、あちこちでレコーディングする予定なんだ。アセンスで数週間やって、冬にはあつたかところへ行って、春にはまた別のところまで。って感じで、来年の夏にはライブも数回やるかもしれない」。

そして! 10月3日には元ドラマーのビル・ペリーとともに、マイク・ミルズとマイケル・スタブが同じスタジオに立った。地元ジョージア州アセンスの上院議員、ダグ・ヘインズの再選の応援コンサートに出演した「ミルズ/トックス」。

ロ・ページ(ハードコア方面か「ただでやれる」系)をサファインする日々です。と、年の最後こんな話で終わるのもつらいので、最後の一通。

スペースシャワーTVのフジロック総集編番組を見てたら、どこかで見たことがあるメカニにひげ面のオヤジが上機嫌にインタビューを受けていました。酔っ払ひげオヤジは、「フジロック最高! ベリー・ファレル、ベリー・ファレル」と完全フジロック馬鹿な発言をしていました。こんな大人になりたいなあ、とおバカ私を思い出しました。（千葉県/中野里美/21歳）

（千葉県/中野里美/21歳）

ホント、馬鹿ばかりですいません。この「READERS' FORUM」は皆さんのお便りや成り立ちます。本誌への感想やここに掲載された方々への意見/反論、その他提言、小ネタ、なんでもOKです。皆さんのハガキをお寄せ下さい。なお、掲載された方の中から抽選で、P.280のプレゼントを発送させて頂きます。今月はチケット・プレゼント第二回! 頑張ってチケット、ゲットだぜ!

皆さんの言葉が彼に心に残ってくれ

ばいいのよが、相変わらずネットでエ

NEWS

力が必要だった」と語ったのは、ビョークの母親。BBCによると、56歳の彼女は、米大企業がアイスランドに20億ドルがけで建設しようとしている発電所に反対し、3週間以上わたるハンガース・トライクを行った。アルミニウム業の最大手ルコアは、アイスランド政府の許可を取り、パトナ氷河の近くにアルミニウム製錬所と水力発電所の建設を計画。ビョークの「ヨーガ」のビデオにも登場したこの氷河は、多くの貴重な動植物の生息地だ。[「世界から注目を集められたけれど、まだまだ続けていかなきゃ」とは、3週間ナチュラ・ティールとハーブだけしか口にせず、6キロも体重が減ったビョーク母の談話。意志の強さは家系のようです。興味のある方は反対キャンペーンのサイト(www.raddir.is)へ。

クリス・マーティン、

イアン・マッカロウのソロ作に参加

らっているイアン・マッカロウ(エコー&ザ・バニーメン)のソロ新作に参加したい。彼らの大ヒット中の「静寂の世界」の制作時に、マッカロウが大きな支えとなったことは、これまで何度も語ってきたクリス。彼のソロ新作では、2曲でヴォーカル参加している。

また、「ローリング・ストーン」誌では、「僕のトップ10アルバム」に、バニーメンの「オーシャン・レイン」だけでなく、現在のツアーでサポートを務めるアシユの「1977」や、オアシスの「ディフィニトリ・メイビー」をクリスは挙げていた。かなり理屈っぽいキャラのようですね。

リパティエンスの大暴れツアーは

なんと続いた

カールとビートは、一晩で1万ポンドを使い切ってしまったらしい。大丈夫なんじゃないか? 関係者によると、件のツアー・マネージャーはとてもいい人なんだとか。「でもかなり厳しく管理したんで、そこがカールとビートとは合わなくて。22年やってきて、これほどひどいツアーは初めてだ、って書いてよ。ザ・ストロークスなんてこれに比べればお子様だ、ってね」。

フィッシュ、

突如新作をリリース!

2年前、ツアーによる疲労からいったん休止宣言をしたフィッシュ。4人のメンバーが再び集まるのは2年が必要だったけど、新作アルバム制作にはなんと4日しかかからなかったらしい。スタジオ・レコーディングとしては9作目になる「Round Room」は、12月10日リリース。大晦日にはNYのマジソン・スクエア・ガーデンで、再結成ライブも予定されている。デッド・ヘッドならぬフィッシュ・ヘッドの大集会成为りそう。また、新作を彼らのサイトを通じて予約すると、ポスターや来年1月のライブのチケットが当たるというファンにはうれしい特典もあり。2月には大々的な全米ツアーも再開され、来年は「フィッ

シュ巻返し」の年になりそうだ。

マーク・チャップマン、

仮釈放ならず

80年12月8日にジョン・レノンを射殺した、マーク・チャップマンの二度目の仮釈放が却下された。2年前に最初の仮釈放が却下された際も、ヨーコ・オノがステートメントを発表するなどして却下された彼は、現在ニューヨークの刑務所で終身刑を服役中。2年後に再度審議はされるが、殺されたのがジョン・レノンであることによって、チャップマンが仮釈放される見込みはまったくないと見られている。

ザ・ヴァインズ、

フィル・スペクターをスカウト

セカンド・アルバムのプロデューサーに、ザ・ヴァインズが「ウォール・オブ・サウンド」の伝説、フィル・スペクターをリクルート中らしい。現在スペクターはスターセーラーの新作を手掛けている、「どちらのグループにも非常に期待している」とのこと。はてさて、実現するんでしょうか。

ところでそのフィル・スペクターだが、「業界でもっとも長い著作権料バトル

と呼ばれる裁判を88年からザ・ロネット

と続けた。それが10月17日、NYの最高裁で、「フィル・スペクターはザ・ロネットに300万ドル払わなくてもいい」という判決が下った模様。結局63年当時の契約によって、スペクターに「ビー・マイ・ベイビー」など大ヒット曲の全権が認められたわけだが、ザ・ロネット側はなんと、これまでに1万5千ドルしか手にしていないとか。お気の毒です。

ザ・ストリート、

「デモン・アルバムって誰?」

先号で、自分達について曲で書いてくれたスウェードについて、オキサイド&ニュートリノが「聴いたことないだよね」と言った発言を紹介したが、今号のジェネレーション・ギャップネタは、ブラーとザ・ストリート。9月12日、ザ・ストリートことマーク・スキナーがロンドンで開いたライブに、デモン・アルバムがチェックしに来ていたのだ。マークが「ローリング・ストーン」誌に載った話は以下の通り。「彼が誰か、知らなかったんだ。で、[有名なサークル]によるこうそ?」と書かれて、「うんええ、へらへらして?」って言

バンドの公式サイトで、マネージャーのパティスがファンからの手紙に答えたところによると、R.E.M.の新作レコーディングはすでに各地で始まっているらしい。「今度は短期間ずつ、あちこちでレコーディングする予定なんだ。アセンスで数週間やって、冬にはあつたかところへ行って、春にはまた別のところまで。って感じで、来年の夏にはライブも数回やるかもしれない」。

そして! 10月3日には元ドラマーのビル・ペリーとともに、マイク・ミルズとマイケル・スタブが同じスタジオに立った。地元ジョージア州アセンスの上院議員、ダグ・ヘインズの再選の応援コンサートに出演した「ミルズ/トックス」。

と呼ばれる裁判を88年からザ・ロネット

と続けた。それが10月17日、NYの最高裁で、「フィル・スペクターはザ・ロネットに300万ドル払わなくてもいい」という判決が下った模様。結局63年当時の契約によって、スペクターに「ビー・マイ・ベイビー」など大ヒット曲の全権が認められたわけだが、ザ・ロネット側はなんと、これまでに1万5千ドルしか手にしていないとか。お気の毒です。

ザ・ストリート、

「デモン・アルバムって誰?」

先号で、自分達について曲で書いてくれたスウェードについて、オキサイド&ニュートリノが「聴いたことないだよね」と言った発言を紹介したが、今号のジェネレーション・ギャップネタは、ブラーとザ・ストリート。9月12日、ザ・ストリートことマーク・スキナーがロンドンで開いたライブに、デモン・アルバムがチェックしに来ていたのだ。マークが「ローリング・ストーン」誌に載った話は以下の通り。「彼が誰か、知らなかったんだ。で、[有名なサークル]によるこうそ?」と書かれて、「うんええ、へらへらして?」って言

バンドの公式サイトで、マネージャーのパティスがファンからの手紙に答えたところによると、R.E.M.の新作レコーディングはすでに各地で始まっているらしい。「今度は短期間ずつ、あちこちでレコーディングする予定なんだ。アセンスで数週間やって、冬にはあつたかところへ行って、春にはまた別のところまで。って感じで、来年の夏にはライブも数回やるかもしれない」。

そして! 10月3日には元ドラマーのビル・ペリーとともに、マイク・ミルズとマイケル・スタブが同じスタジオに立った。地元ジョージア州アセンスの上院議員、ダグ・ヘインズの再選の応援コンサートに出演した「ミルズ/トックス」。

と呼ばれる裁判を88年からザ・ロネット

と続けた。それが10月17日、NYの最高裁で、「フィル・スペクターはザ・ロネットに300万ドル払わなくてもいい」という判決が下った模様。結局63年当時の契約によって、スペクターに「ビー・マイ・ベイビー」など大ヒット曲の全権が認められたわけだが、ザ・ロネット側はなんと、これまでに1万5千ドルしか手にしていないとか。お気の毒です。

ザ・ストリート、

「デモン・アルバムって誰?」

先号で、自分達について曲で書いてくれたスウェードについて、オキサイド&ニュートリノが「聴いたことないだよね」と言った発言を紹介したが、今号のジェネレーション・ギャップネタは、ブラーとザ・ストリート。9月12日、ザ・ストリートことマーク・スキナーがロンドンで開いたライブに、デモン・アルバムがチェックしに来ていたのだ。マークが「ローリング・ストーン」誌に載った話は以下の通り。「彼が誰か、知らなかったんだ。で、[有名なサークル]によるこうそ?」と書かれて、「うんええ、へらへらして?」って言

バンドの公式サイトで、マネージャーのパティスがファンからの手紙に答えたところによると、R.E.M.の新作レコーディングはすでに各地で始まっているらしい。「今度は短期間ずつ、あちこちでレコーディングする予定なんだ。アセンスで数週間やって、冬にはあつたかところへ行って、春にはまた別のところまで。って感じで、来年の夏にはライブも数回やるかもしれない」。

そして! 10月3日には元ドラマーのビル・ペリーとともに、マイク・ミルズとマイケル・スタブが同じスタジオに立った。地元ジョージア州アセンスの上院議員、ダグ・ヘインズの再選の応援コンサートに出演した「ミルズ/トックス」。

と呼ばれる裁判を88年からザ・ロネット

と続けた。それが10月17日、NYの最高裁で、「フィル・スペクターはザ・ロネットに300万ドル払わなくてもいい」という判決が下った模様。結局63年当時の契約によって、スペクターに「ビー・マイ・ベイビー」など大ヒット曲の全権が認められたわけだが、ザ・ロネット側はなんと、これまでに1万5千ドルしか手にしていないとか。お気の毒です。

ザ・ストリート、

「デモン・アルバムって誰?」

先号で、自分達について曲で書いてくれたスウェードについて、オキサイド&ニュートリノが「聴いたことないだよね」と言った発言を紹介したが、今号のジェネレーション・ギャップネタは、ブラーとザ・ストリート。9月12日、ザ・ストリートことマーク・スキナーがロンドンで開いたライブに、デモン・アルバムがチェックしに来ていたのだ。マークが「ローリング・ストーン」誌に載った話は以下の通り。「彼が誰か、知らなかったんだ。で、[有名なサークル]によるこうそ?」と書かれて、「うんええ、へらへらして?」って言

バンドの公式サイトで、マネージャーのパティスがファンからの手紙に答えたところによると、R.E.M.の新作レコーディングはすでに各地で始まっているらしい。「今度は短期間ずつ、あちこちでレコーディングする予定なんだ。アセンスで数週間やって、冬にはあつたかところへ行って、春にはまた別のところまで。って感じで、来年の夏にはライブも数回やるかもしれない」。

そして! 10月3日には元ドラマーのビル・ペリーとともに、マイク・ミルズとマイケル・スタブが同じスタジオに立った。地元ジョージア州アセンスの上院議員、ダグ・ヘインズの再選の応援コンサートに出演した「ミルズ/トックス」。

と呼ばれる裁判を88年からザ・ロネット

と続けた。それが10月17日、NYの最高裁で、「フィル・スペクターはザ・ロネットに300万ドル払わなくてもいい」という判決が下った模様。結局63年当時の契約によって、スペクターに「ビー・マイ・ベイビー」など大ヒット曲の全権が認められたわけだが、ザ・ロネット側はなんと、これまでに1万5千ドルしか手にしていないとか。お気の毒です。

ザ・ストリート、

「デモン・アルバムって誰?」

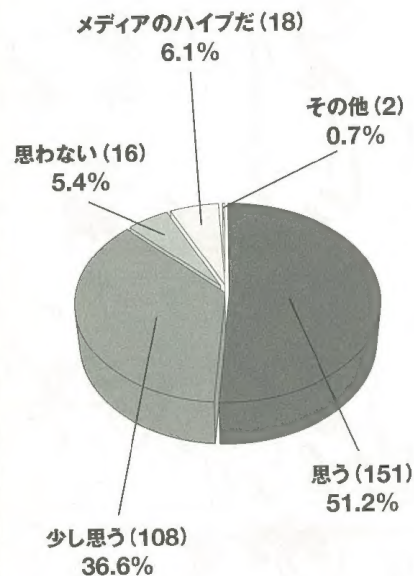
先号で、自分達について曲で書いてくれたスウェードについて、オキサイド&ニュートリノが「聴いたことないだよね」と言った発言を紹介したが、今号のジェネレーション・ギャップネタは、ブラーとザ・ストリート。9月12日、ザ・ストリートことマーク・スキナーがロンドンで開いたライブに、デモン・アルバムがチェックしに来ていたのだ。マークが「ローリング・ストーン」誌に載った話は以下の通り。「彼が誰か、知らなかったんだ。で、[有名なサークル]によるこうそ?」と書かれて、「うんええ、へらへらして?」って言

バンドの公式サイトで、マネージャーのパティスがファンからの手紙に答えたところによると、R.E.M.の新作レコーディングはすでに各地で始まっているらしい。「今度は短期間ずつ、あちこちでレコーディングする予定なんだ。アセンスで数週間やって、冬にはあつたかところへ行って、春にはまた別のところまで。って感じで、来年の夏にはライブも数回やるかもしれない」。

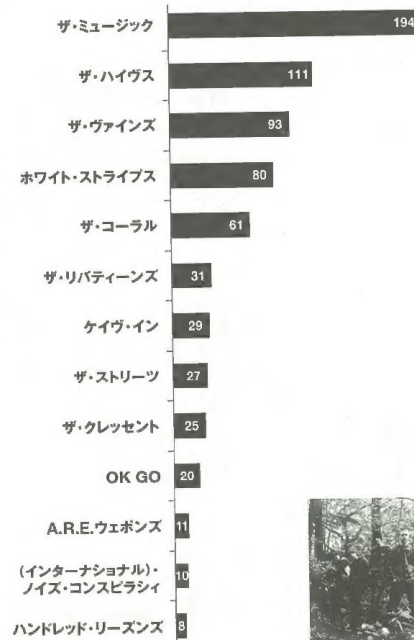
そして! 10月3日には元ドラマーのビル・ペリーとともに、マイク・ミルズとマイケル・スタブが同じスタジオに立った。地元ジョージア州アセンスの上院議員、ダグ・ヘインズの再選の応援コンサートに出演した「ミルズ/トックス」。

こちら「スヌーザーズ・サーベイ」は、「本誌読者が日々、何を考え、何に感動し、どんな匂いの尻をこいているか」を、厳密なアンケートにより統計。その結果、みなさんがどれだけ立派なダメ人間であるかを立証しようという、挑戦的な内容。第9回目の今回は、「俺的・最重要新人」、および「英国3大バンド&ザ・フー人気投票」のアンケート結果発表から。そして今回のお題は、本誌今号の特集に連動、「激動の91年」世代調査、そして「2003年、変化の予感」です

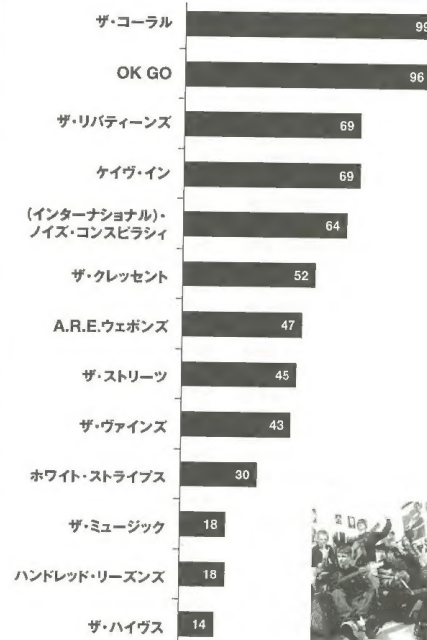
①ここ1、2年でイキのいい新人ロック・バンドが盛り上がってきていると思いますか?



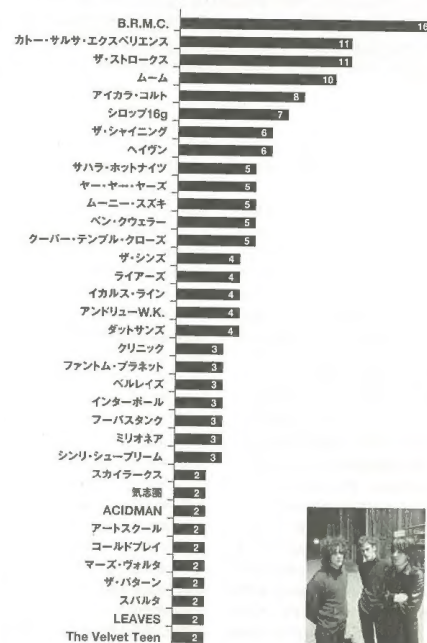
②前号で紹介した新人バンド13組のうち、あなたの好きなバンドは?



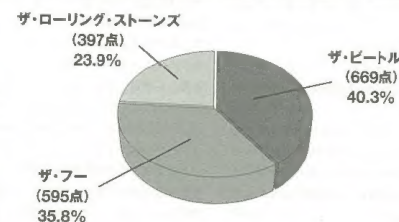
③13組の新人アーティストのうち、あまりよく知らないが気になってるバンドは?



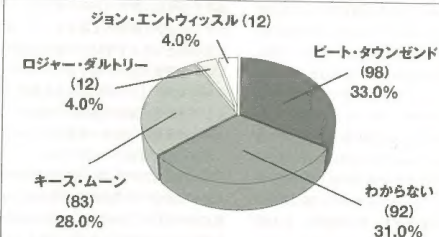
④前号で紹介されていなかったバンドで、あなたが好きな新人バンドは?



⑤60年代英国三大バンドを、あなたの好きな順番で並べるとしたら?



⑥ザ・フーのフェイヴァリット・メンバーは誰ですか?



ダイ「えー、今回のスヌーザーズ・サーベイのお題は、前号の特集記事で紹介した全13組から選ぶ、「俺の新人バンド」と、「英国3大バンド&ザ・フー人気投票」でした。で、今回の結果がこれ」
唐沢「やっぱり、みんな、ここ1、2年、盛り上がってるんだねー」
ダイ「で、ザ・ミュージック強い」
唐沢「別にアンタが強いわけじゃないよ」
加藤「でも、『気になるバンド』のところを見ると、コーラルが未知なる怪物って感じで、かなりインパクトがあったみたいだね。ま、僕の記事もかなりあったしね。で、OK GOが第二位」
唐沢「さすがが、アタシ」

ダイ「それじゃ、自分が紹介したアーティストの星取り表じゃないですか!」
唐沢「だって、編集長がきばって、4Pもさいたのに、ケイヴ・インの人気の低いのは、記事書いたアンタのせいだよ」
ダイ「ぶー……」
松田「続いて、60年代英国3大バンド、「一番好き」から順に、3点、2点、1点で集計してみた結果です。どうです?」
唐沢「ほら、最近、世間のいろんな音楽雑誌さんが、ストーンズを表紙に選んでたじゃない? それなのに、ストーンズ、全然負け負けじゃん」
加藤「まあ、投票してんのが、こんな雑誌の読者だからね」

ダイ「こことこのロックンロール・リヴァイヴァルの親玉ってイメージもあるんだろけど、それでも、ザ・フーがビートルズとこんなにも接近しているのは、ここ日本じゃ歴史的快挙だよ」
唐沢「編集長の偏見は伝染するっていうかね。でもさ、正直、最後の質問の結果は、ちょっと残念だねー」
加藤「確かに。っていうか、『わからない』に大差で負けた、ジョン・エントウィッスルの立場は……」
松田「黙としよう、黙と」
ダイ「っていうか、ヴォーカルなのに、ロジャーの存在感って……」
唐沢「そういうバンドだしね(笑)」

ダイ「というわけで、今回のサーベイは「あなたの激動の91年と2003年」を探ります。P.210からの大特集と連動してしますので、ご参照を」
松田「で、P.208後ろにあるハガキに、みっちりお書きください」
ダイ「で、『2003年は何かが起きる!』っていう、編集長の直感って?」
唐沢「妄想でしょ」
松田「いや、でも、確かに、12年って言えば、歴史的な巡りあわせがあるように見受けられますね」
ダイ「あ、松田くんと俺、半年じゃん? やっぱ、半年が僕にとってことですよ」
唐沢「全然関係ないでしょ(笑)」